

## 追 悼

伊藤 洋先生 (1909–2006)  
 Doctor Hirosi Ito (1909–2006)



伊藤 洋 先生

Dr. Hirosi Ito

平成2年（1990）年あるいは3（1991）年1月の新年会（上野・精養軒にて）。

伊藤 洋先生は1909年に高知でお生まれになった。早生まれの上、成績優秀で、中学校を4修で高知高校へ進まれたので、1928年には東京帝国大学植物学科へ入学された。31年に大学院へ進学され、「日本羊歯類」を研究課題とされた。

若い院生の誕生だったが、大学院入学の翌32年に入営され、兵役に従事された。第二次大戦中は中国から昭南にかけて従軍され、終戦時には陸軍大尉に昇任されていたが、復員されたのは46年7月のことだった。

兵役と平行して、大学院生としての研究も

進められ、1936年には東京帝大の植物学教室標本室係となり、39年には東京帝大における東亜及南洋の植物の基礎的研究補助を嘱託されておられるが、この嘱託はその後東京教育大学に職を奉じられてからも継続し、42年に解除されている。その間、ウラボシ科オシダ亜科の研究によって1940年に学位を得ておられる。

1941年に東京文理科大学助教授に任命され、その後従軍期間が挟まるが、49年に教授に昇任され、72年に停年で退官されるまで、大学の組織、名称は変わったものの、引き続き東



昭和33（1958）年夏の分類学野外実習（秩父・甲武信岳にて）。

京教育大学に籍を置かれた。退官後秩父博物館で研究を続けられたこともあったが、それ以外は自由な立場でシダ植物を愛する生活を続けられ、植物研究雑誌の編集委員としても長らく貢献された。1990年代に入った頃から健康を害され、ご自宅で長い闘病生活を続けていたが、2006年9月2日、97歳の大往生をとげられた。先生は1980年に勲三等旭日中綬賞を叙勲されており、お亡くなりになつて正4位に叙せられた。

伊藤先生は一貫してシダ植物を対象とした研究を続けられた。学位論文ともなったオシダ類の研究がもっともよくまとまった成果である。20世紀の初頭まで最広義に定義されたウラボシ科が系統的にまとまつた群でないことはBowerの比較形態学の研究に基づいて30年前後からCopelandやC. Christensenによって指摘されていた。オシダ類については、東亜の種を具体的な材料として、秦仁昌が属の階級での整理を進め、30年代に精力的に成果を公表していた。この研究と平行して、日本から台湾にかけての種を対象に詳細な検討をされ、種内の分類群まで丁寧に整理されたのが、三省堂から出版されていた新日本植物誌の1冊にまとめられたウラボシ科オシダ亜科Iだった。

『日本羊歯類図鑑』は第二次大戦さ中の1944年の刊行である。伊藤先生は原稿、図版

の準備をされたものの、準備が整った段階で応召され、中支へ赴かれた。戦地で忘れられておられたところへ厚生閣から連絡が入り、印刷、校正などは木村陽二郎先生が引き受けられたものだと、あとがきに記されている。この例に見るように、もっとも脂の乗り切つた時期を戦地で過ごされるなど、研究生生活としては決して恵まれないものだった。論文も数が多いわけではないが、コケシノブ科、シシラン科などの研究で鋭い知見を示された。

戦後の日本人の生活が落ち着いた頃から、東京教育大学ではシダやコケを学ぶ研究者が輩出した。ちょうどその頃、1957年に伊藤洋、百瀬静男、田川基二の3先生が発起人となって日本シダ学会が発足した。保井コノ、小倉謙先生らがご健在で、初期の会合には参加され、お話を伺うこともできた。大学院へ進んで間もなくのわたしたちには大先輩の警談に接するよい機会だった。まだ駆け出しだった西田誠さんと一緒に下働きをした頃から、もう半世紀になる。

研究仲間として伊藤研究室の人たちと接する機会は、その後もずっと頻繁だったが、いつも和気あいあいという感じが、少なくとも外からは読み取れ、よい雰囲気が醸し出されていたように思う。ただ、異分野の教育大卒業生からは、伊藤先生はきわめて厳格な先生だと聞き、驚いたことがあった。わたしが伊藤先生に直接ご指導いただいたのは日本シダの会の全国採集会以来であり、最初にお逢いした時からずいぶん優しい先生だという印象を持っていたからである。ついでにいえば、最後にご一緒したのは、東京大学総合研究資料館（当時）で開かれた植物研究雑誌の編集会に出席しようと思って2号館の傍を歩いていたら、伊藤先生が、資料館はどこだったっけねえ、とおっしゃって資料館の方から戻つて来られるのにはぱったりお逢いした時だった。それから間もなく編集委員も退かれ、長い療養生活に入れ、かつての伊藤研の仲間たちから、時々お宅へ伺われた話などを耳にするだけになっていた。今は、先に往かれた百瀬、田川、西田などかつてのお仲間たちと冥界でシダを愛でておられることだろう。謹んでご冥福をお祈りする。

（岩槻邦男）